

# 授業資料

年 組 番号 氏名

「 $\sqrt{-1}$  は描けるのか!？」

Vol. 1

HIERONYMI CAR  
DANI, PRÆSTANTISSIMI MATHE  
MATICI, PHILOSOPHI, AC MEDICI,  
ARTIS MAGNÆ,  
SIVE DE REGVLIS ALGEBRAICIS,  
Lib. unus. Qui & totius operis de Arithmetica, quod  
OPVS PERFECTVM  
inscripti, est in ordine Decimus.



HAbes in hoc libro, studiose Lector, Regulas Algebraicas (itali, de la Cosa  
si uocant) nouis adimensionibus, ac demonstrationibus ab Authore ma  
locupletatas, ut pro pauculis antea uulgis tritis, tam septuaginta euasisti. Nos  
q; solum, uti utras numerus alteri, aut duo uni, uerum etiam, ubi duo duobus,  
aut tres uni equales fuerint, noscum explicant. Hunc autem librum ideo foras  
sim edere placuit, ut hoc abibruissimo, & plane inextinguibile totius Arithmet  
eae thesauro in lucem eruto, & quasi in theatro quodam omnibus ad spectan  
dum exposito, Lectores incitarentur, ut reliquos Operis Perfecti libros, qui per  
Tomos edentur, tanto auidius amplectantur, ac minore fastidio perdiscant.

授業者：筑波大学大学院教育研究科 1 年

小松 孝太郎



# 1. $\sqrt{-1}$ の出現

## カルダノの考え

事前課題で「 $x+y=16, x \cdot y=60$  を満たす  $x, y$  を求めよ」という問題について、15 世紀ごろの人たちが生み出した解法の手順を考えました。さらにカルダノという人は、同じ解法手順を利用することで「 $x+y=10, x \cdot y=40$  を満たす  $x, y$  を求めよ」という問題を解こうとしました。

カルダノという人物とは、

名前：Gerolamo Cardano

(英語圏では Jerome Cardan)

年代：1501 年～1576 年

出身地：イタリア

名著：『Ars Magna』(『大いなる技法』とも呼ばれる)

彼はこの本のなかで 3 次方程式の解法を導いた。16

世紀中頃までには、医学者、数学者、占星術師として

カルダノの名はヨーロッパ中で有名になっていた。



では事前課題の ~ の手順と対応させながら、「 $x+y=10, x \cdot y=40$  を満たす  $x, y$  を求めよ」という問題について、カルダノの解法手順をたどってみよう。

解答欄 .

答えはどのようになったかな？

答え .

**事前課題の問題と同様にこの解法手順も図示できるでしょうか？**

## カルダノの戸惑い

カルダノは以上のような方法で解答を得ましたが、この結果に戸惑いを示しました。

精神の苦痛を  
忘れて……



また、カルダノは自身で導いた3次方程式の解の公式を方程式  $x^3 = 15x + 4$  の場合にも適用すると、方程式の解が

$$x = \sqrt[3]{2 + \sqrt{-121}} + \sqrt[3]{2 - \sqrt{-121}}$$

になってしまうため、このような場合を casus irreducibilis (還元できない場合) として避けました。しかし、 $x = 4$  がこの方程式の解であるもカルダノは知っており、この自己矛盾を彼は理解することができませんでした。

## 2. $\sqrt{-1}$ の計算法則

カルダノがこの考えを示した時代は、数として負の数は認められていませんでした。そのような時代に2乗して負になる数(以下、負数の平方根)が認められるわけではありません。

しかし、この負数の平方根に計算法則を定義した人がいます。それは、Rafael Bombelli(1526年~1572年)(以下、ボンベリ)という人物です。彼は、カルダノの弟子で、著書『L'algebra』のなかで、負数の平方根について言及しました。

お話。

当時、数字の3と言えば長さ3の棒を指していたように、数字は図や物などで視覚的に表されなければ認められませんでした。従って、-3といった負の数は「無いものよりも小さい数」であり、当時は視覚的に表すことができなかつたのです。

## ボンベリの考え

彼は、 $+\sqrt{-1}$ 、 $-\sqrt{-1}$ をそれぞれ piu di meno、meno di meno という表現を用いて表しました。

そして、 $(+)\times(+)=(+)$ 、 $(+)\times(-)=(-)$ 、 $(-)\times(+)=(-)$ 、 $(-)\times(-)=(+)$  といった演算を拡張し、以下の新しい法則を定めました。右側の空欄に、ボンベリの述べていることを式で表してみよう。

ボンベリの記述	式で表すと、
piu via piu di meno, fa piu di meno	
meno via piu di meno, fa meno di meno	
piu via meno di meno, fa meno di meno	
meno via meno di meno, fa piu di meno	
piu di meno via piu di meno, fa meno	
piu di meno via meno di meno, fa piu	
meno di meno via piu di meno, fa piu	
meno di meno via meno di meno, fa meno	
注意) “A via B, fa C”は $A \times B = C$ ということ。	

その後、ボンベリはこれを基に  $(2+\sqrt{-1})^3$  と  $(2-\sqrt{-1})^3$  を計算しました。みんなもこの2つを計算し、さらに  $\sqrt[3]{2+\sqrt{-121}} + \sqrt[3]{2-\sqrt{-121}}$  の値がどうなるか考えてみよう。

### 3. $\sqrt{-1}$ の図示に対する否定的な意見

ボンペリが負数の平方根に対して計算法則を決めたにも関わらず、それを視覚的に表すことはまだ不可能でした。この時代、負数の図示が成功していたため、負数の平方根が広く認知されるためにも、この数を図示することが課題となりました。

しかし、本当に図示することができるのでしょうか？

お話．

負数の図示はジラールやデカルトらによって行われました。ジラールは「幾何学での負数は逆進を示し、一方、正数は前進を示す」としていました。つまり、現代で言う数直線や向きの概念を用いることで、負数を視覚的に表現したのです。

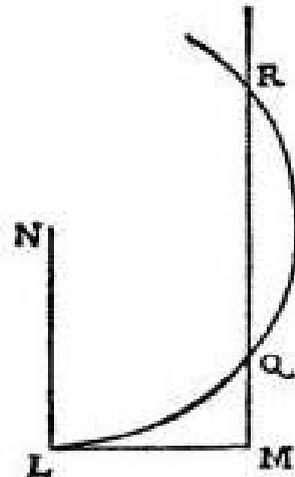
負数の平方根の図示に否定的な意見を示した数学者のなかでも、有名なデカルトの見解について考えてみましょう。

#### デカルトの見解

デカルト（1596年～1650年）は2次方程式の解とその図示の関係から始めていきました。

右図において、NLを $\frac{1}{2}a$ に等しく、LMを $b$ に等しくしたうえで、点MからLNに平行な線を引く。Nを中心としてLを通る円を描いて、その円弧と平行線の交点をQ、Rとする。ここで、未知な長さMQとMRを $z$ としたとき、 $z$ は以下の2次方程式で表される。

$$z^2 = az - bb$$



**デカルトのこの主張を証明してみましょう!!**

証明 .

QR の中点を O とする . 図より ,

$$NO = LM = ( \quad )$$

NQ は円の半径であることから ,

$$NQ = NL = ( \quad )$$

NQO は斜辺が NQ の直角三角形であることから三平方の定理より ,

$$OQ^2 = ( \quad )^2 - ( \quad )^2$$

$$\therefore OQ = ( \quad )$$

同様にして ,

$$OR = ( \quad )$$

よって ,  $MQ = MO - OQ$  ,  $MR = MO + OR$  より ,

$$MQ = ( \quad )$$

$$MR = ( \quad )$$

z は MQ , MR の長さであることから , MQ , MR を一つの式にまとめて

$$z = ( \quad ) \pm ( \quad )$$

よって , この式を整理していくと ,

$$z - ( \quad ) = \pm ( \quad )$$

両辺を 2 乗すると ,  $\{z - ( \quad )\}^2 = ( \quad )$

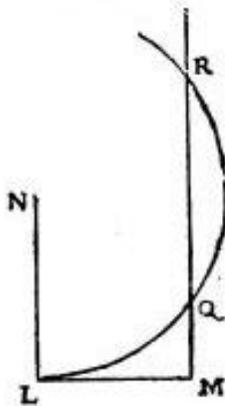
展開して整理すると ,  $z^2 = ( \quad )$

以上より , MQ , MR の長さ z は与えられた 2 次方程式で表されることが証明された .

Enfin si i'ay

$$z^2 \approx az - bb,$$

ie fais NL esgale a  $\frac{1}{2}a$ , & LM esgale a  $b$ , comme deuant; puis, au lieu de ioindre les points M, N, ie tire MQR parallele a LN, & du centre N, par L, ayant



descrit vn cercle qui la coupe aux points Q & R, la ligne cherchée  $z$  est MQ, ou bien MR, car en ce cas elle s'exprime en deux façons, a sçauoir

$$z \approx \frac{1}{2}a + \sqrt{\frac{1}{4}aa - bb},$$

$$\& z \approx \frac{1}{2}a - \sqrt{\frac{1}{4}aa - bb}.$$

Et si le cercle qui, ayant son centre au point N, passe par le point L, ne coupe ny ne touche la ligne droite MQR, il n'y a aucune racine en l'Equation, de façon qu'on peut assurer que la construction du probleſme proposé est impossible\*.

|Au reste, ces mesmes racines se peuuent trouuer par vne infinité d'autres moyens, & i'ay seulement voulu mettre ceux cy, comme fort simples, affin de faire voir qu'on peut construire tous les Probleſmes de la Geometrie ordinaire, fans faire autre chose que le peu qui est compris dans les quatre figures que i'ay expliquées. Ce que ie ne croy pas que les anciens ayent remarqué; car, autrement, ils n'eussent pas pris la peine d'en escrire tant de gros liures, où le seul ordre de leurs propositions nous fait connoistre qu'ils n'ont point eu la vraye methode pour les trouuer toutes, mais qu'ils ont seulement ramassé celles qu'ils ont rencontrées.

\* N.

## デカルトの主張



点Nを中心とし点Lを通る円が直線MQRを切ることも、これに接することもないならば、方程式にはまったく根がなく、提出された問題の作図は不可能と断定することができる。

(出典：デカルト著，原亨吉訳『幾何学』，  
下線授業者)

デカルトの言葉で、点線部分「点Nを中心とし点Lを通る円が直線MQRを切ることも、これに接することもない」とき、 $a$ と $b$ にどのような関係式が成り立ちますか？また、このとき2次方程式  $z^2 = az - bb$  の解はどのような値になりますか？

デカルトは どのような状況のとき、下線部分「提出された問題の作図は不可能と断定する」と言っています。これはどういうことでしょうか？

Au reste, tant les vraies racines que les fausses ne font pas toujours reelles, mais quelquefois seulement imaginaires : c'est a dire qu'on peut bien toujours en imaginer autant que i'ay dit en chaque Equation, mais qu'il n'y a quelquefois aucune quantité qui corres-

(\*) I. — K.

デカルトは図的に表せる数 (+1, -2, 1/2,  $\sqrt{2}$  など) を reelles (フランス語), 負数の平方根を imaginaires (同様にフランス語) と記述しました. これを英訳するとそれぞれ real と imaginary, つまり彼は図的に表せる数を「実際の数 (以下, 実数)」, 負数の平方根は「想像上の数」であると述べました.

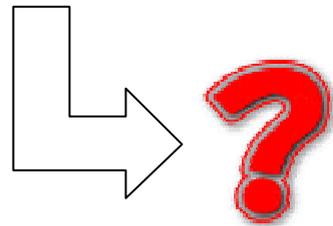
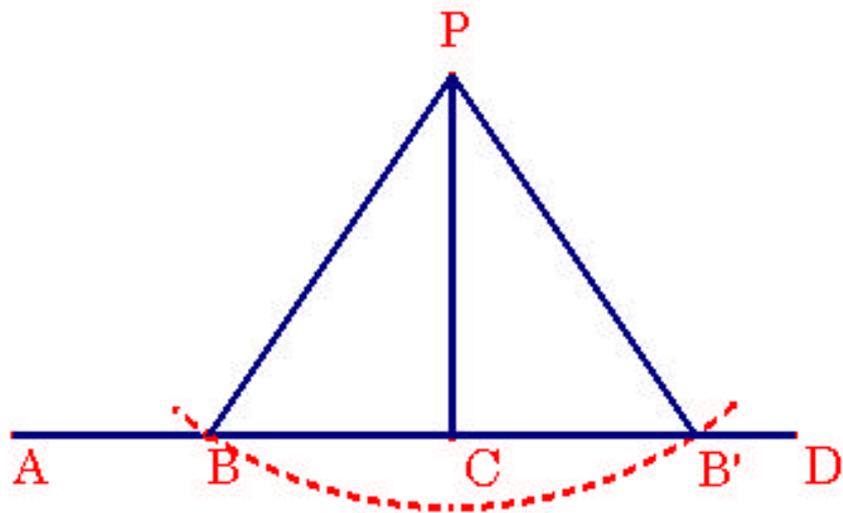
以後, 彼の言葉が広く採用されていくことになりました.

# 授業資料

年 組 番 氏名

「 $\sqrt{-1}$  は描けるのか!？」

Vol. 2



授業者：筑波大学大学院教育研究科 1 年  
小松 孝太郎

1 時間目では・・・

古くから数というものは「図的に表されなければ認められない」ということでした。ボンベリによって $\sqrt{-1}$ の計算法則が確立された16, 17世紀において、 $\sqrt{-1}$ を図示することは当時の課題でした。しかし、これを図的に表現することは不可能であるとされ、デカルトは負数の平方根を「想像上のもの」とであると述べました。

このような時代にあって当時の数学者は以下の野望に燃えるわけです。

**「 $\sqrt{-1}$ を図示することでそれを真に  
認められるようにしよう。」**

それでは負数の平方根の図示に挑戦した数学者の考えをみんなで考えていこう!!

#### 4 . $\sqrt{-1}$ の図示への挑戦 (ウォリス)

負数の平方根の図示に果敢にも挑戦した最初の人ウォリスという人物です。

名前 : John Wallis

年代 : 1616年 ~ 1703年

出身地 : イギリス

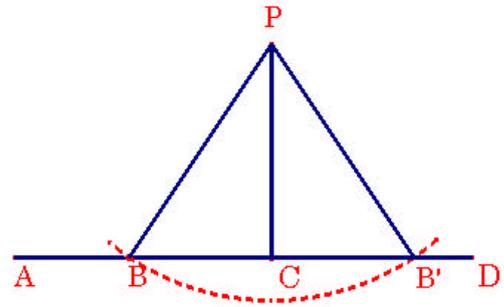
彼はニュートンが脚光を浴びる直前の時代において最も有名な数学者でした。数々の名著を発表し、微積分学を発達させたニュートンに多大な影響を及ぼしました。



## ウォリスの挑戦 その1

彼は $a$ に関する2次方程式  $a^2 - ba + a = 0$  の解を図示することから始めました。

まず、ある直線AD上に長さが $b/2$ である線分ACをとる。次に、Cを通り直線ADに垂直な線分で長さが $\sqrt{a}$ である線分PCをとる。そして、点Pを中心とし半径の長さがACと同じである円弧を描き、その円弧と直線ADとの交点をB、B'とする。



このとき、2つの長さAB、AB'がこの方程式  $a^2 - ba + a = 0$  の解である。

### 証明)

与えられた2次方程式  $a^2 - ba + a = 0$  を解くと、

$$\{a - (\quad)\}^2 = (\quad)$$

$$a - (\quad) = (\quad)$$

$$\therefore a = (\quad) \pm (\quad) \dots$$

この解を線分ACやAB', ABなどで表したい。

$$AC = (\quad) \dots$$

また、 $\triangle PCB'$ は  $\angle C = 90^\circ$  の直角三角形より、

$$CB'^2 = (\quad)^2 - (\quad)^2$$

$$= (\quad)$$

$$\therefore CB' = (\quad)$$

CB'とは反対向きの長さ CB を  $CB = -CB'$  とすると ,

$$CB = -CB' = ( \quad ) \cdots$$

2 次方程式の解 を , 式を利用して変形していくと ,

$$\begin{aligned} a &= ( \quad ) \pm ( \quad ) \\ &= ( \quad ) + ( \quad ) , ( \quad ) + ( \quad ) \\ &= ( \quad ) , ( \quad ) \end{aligned}$$

よって , 2つの長さ AB, AB'は2次方程式  $a^2 - ba + a = 0$  の解を図示するものである .

証明が終わった人は以下のことを考えましょう .

2 次方程式の解を図示するこの方法に似たものを以前に考えた人はいませんか？

ウォリスの場合 , CP の長さが円弧の半径の長さを超えるとき ,  $b$  と  $a$  の間にはどのような関係式が成り立つでしょうか？また , このとき 2 次方程式の解を示す重要な 2 点 B, B'はどのような点になるでしょうか？

の場合 , 2 次方程式  $a^2 - ba + a = 0$  の解はどのような値になるでしょうか？

の人は , という状況になったら何と言っていたでしょうか？

## ウォリスの挑戦 その2

ウォリスは、 $a$  に関する 2 次方程式に関して、解に負数の平方根を含む場合の  $a^2 - ba + a = 0 (b/2 < \sqrt{a})$  についてどのように考えたのでしょうか？

ここで便宜上、実数解をもつ場合  $a^2 - ba + a = 0 (b/2 > \sqrt{a}) \cdots (*)$ 、  
解に負数の平方根が含まれる場合  $a^2 - ba + a = 0 (b/2 < \sqrt{a}) \cdots (**)$  とします。

まず、 $(**)$  の解は、負数の平方根まで範囲を認めるなら  $(*)$  と式の見た目は同じで、

$$a = ( \quad )$$

です。 $(*)$  との違いは  $a$  の中が負の数であることです。ここでウォリスは以下のように考えました。



「 $a$  に関する 2 次方程式  $a^2 - ba + a = 0$  の解は 2 つの線分の長さ  $AB, AB'$  で図示される」という先ほどの証明は、 $b/2 > \sqrt{a}$  という条件の下で進められていた。この証明が  $b/2 < \sqrt{a}$  の場合でも成り立つといいなあ。

もし成り立つのなら、 $(**)$  の場合でも  $(*)$  の場合と同じ結論を得ることになり、 $(**)$  の場合は解に負数の平方根を含むので、負数の平方根が図示できることになる。

**しかし、本当に  $b/2 > \sqrt{a}$  の場合に関する証明の過程が  
 $b/2 < \sqrt{a}$  の場合にも全て成り立つのでしょうか？**

## 討論

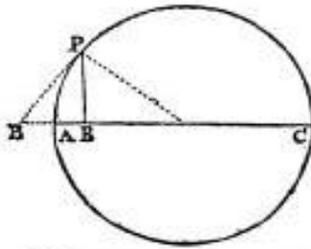
- ・ ウォリスの考えは正しいだろうか？間違いだろうか？正しいと思う人は正しいと書き，間違いだと思う人はどこが間違いかを指摘してみよう．

- ・ ウォリス（役を演じる授業者）の「つじつま合わせ」は正しいだろうか？間違いだろうか？正しいと思う人は正しいと書き，間違いだと思う人はどこが間違いか指摘してみよう．

situ quidem, non diametrice contrario, sed subcontrario; prorsum (ut prius) ab A, sed deorsum: similiterque si fumatur  $AB = -b$  retrorsum, &  $AC = +c$  (ut prius) sursum; erit  $BC = -bc$  (propter contraria signa  $-$  in  $+$ ) situ item subcontrario; sursum (ut prius) sed retrorsum.

Habetur itaque (utcumque fumantur  $a, b,$ ) Quadratum, seu Rectangulum, (in eodem Plano) reale: Affirmativum quidem si signa sint similia; sed situ diametrice contrario si sit utrobique  $-$ , illi qui foret si utrobique  $+$ : Negativum vero, si dissimilia; & situ subcontrario; nempe, vel prorsum sed deorsum, vel sursum sed retrorsum.

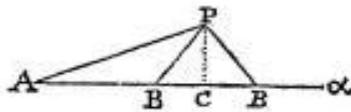
Idem fere conspicietur, si, pro quadratis his five rectangulis, fumantur mediæ proportionales ut horum planorum radices; quarum itaque novus oriatur eandem situs, prout signa sunt similia aut dissimilia.



Verbi gratia; Si prorsum ab A fumatur  $AB = +b$ , & prorsum adhuc (in eadem recta)  $BC = +c$ ; fitque AC (=  $AB + BC = +b + c$ ) diameter circuli: erit sinus rectus, seu media proportionalis,  $BP = \sqrt{+bc}$ .

Sin. retrorsum ab A (adeoque cum contrario signo) fumatur  $-AB = -b$ ; & à B prorsum,  $BC = +c$ ; manente eadem circuli diametro AC =  $-AB + BC = -b + c$ : erit Tangens, seu media proportionalis,  $BP = \sqrt{-bc}$ .

Adeoque  $\sqrt{+bc}$  significabit Sinum rectum, &  $\sqrt{-bc}$  Tangentem, ejusdem (in eodem circulo) Arcus AP; ab eodem P puncto ad eandem AC diametrum, saltem productam. Ipsumque (ad centrum O) triangulum OBP rectangulum, quod prius erat rectangulum ad B, fiet (casu posteriori) rectangulum ad P.



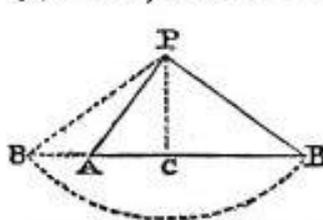
Ponamus jam (majoris illustrationis gratia) super rectam positionem datam AC, triangulum constitutum ABP, cujus datum sit crus alterum  $AP = 20$ ; una cum (angulo PAB, adeoque) altitudine  $PC = 12$ ; reliquique cruris longitudine  $PB = 15$ ; & querendum sit punctum B, seu basis AB longitudo.

Manifestum est (propter  $APq = 400$ , &  $PCq = 144$ ) horum quadratorum differentiam fore  $256 (= 400 - 144) = ACq$ .

Adeoque AC (=  $\sqrt{256}$ ) =  $+16$ , vel  $-16$ ; prorsum vel retrorsum ab A, prout fumere libeat radicem affirmativam, vel negativam. Libet jam affirmativam fumere; adeoque AC (prorsum ab A) =  $+16$ .

Tum, propter datum  $BPq = 225$ , &  $PCq = 144$ ; horum quadratorum differentia  $CBq = (225 - 144) = 81$ . Adeoque  $CB = \sqrt{81}$ ; quam indifferenter dicamus  $+9$ , aut  $-9$ ; adeoque vel prorsum à C, vel retrorsum, pro arbitrio fumendam. Unde duplex oritur longitudo rectæ AB; nimirum  $AB = 16 + 9 = 25$ ; aut  $AB = 16 - 9 = 7$ . Affirmativa utraque.

Quod si ante fumere libuisset, retrorsum ab A,  $AC = -16$ ; foret  $AB = -16 + 9 = -7$ , &  $AB = -16 - 9 = -25$ . Utraque Negativa.



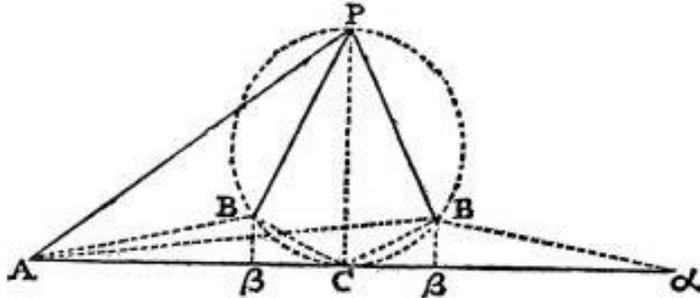
Ponamus jam  $AP = 15$ ,  $PC = 12$ , (adeoque  $AC = \sqrt{225 - 144} = \sqrt{81} = +9$ ), &  $PB = 20$ , (adeoque  $BC = \sqrt{400 - 144} = \sqrt{256} = \pm 16$ ); Tunc erit  $AB = 9 + 16 = +25$ ; vel  $AB = 9 - 16 = -7$ : altera affirmativa, altera Negativa. Idemque valores prodibunt si fumatur  $AC = \sqrt{81} = -9$ , sed alternatis signis. Nempe  $AB = -9 + 16 = +7$ , &  $AB = -9 - 16 = -25$ .

Et in casuum horum singulis habetur B punctum (aut prorsum aut retrorsum ab A) in eadem exposita AC recta infinita.

Et hujusmodi sunt Aequationes omnes quadraticæ, in quibus Radices sunt Reales, (sive sint affirmativæ ambæ, sive ambæ negativæ, sive altera affirmativa, altera negativa) absque ulla inde impossibilitate alia quam (quod in lateralibus item æquationibus contingit) quod Radicum vel altera vel utraque nonnunquam prodeat Negativa.

Verum,

Verum, si ponamus  $AP = 20$ ,  $PB = 12$ ,  $PC = 15$ , (adeoque  $AC = \sqrt{175}$ ;) Ubi subductum fuerit  $PCq = 225$ , ex  $PBq = 144$ , quo habeatur  $BCq$ ; prodibit residuum negativum,  $144 - 225 = -81 = BCq$ . (Quod vocat *Bombellius* *piu di meno, plus e minori*.)



Adeoque  $BCq$  erit quidem duorum  $PBq$ ,  $PCq$ , differentia: sed differentia negativa,  $-81$ : propter  $PC$  (quæ minor supponebatur) majorem quam  $PB$ . Et Triangulum  $PBC$ , rectangulum quidem, sed non (quod supponebatur) ad  $C$ , sed ad  $B$ .

Indeque duplex (ut ante) prodibit valor rectæ  $AB$ , nempe,  $\sqrt{175} + \sqrt{-81}$ ; &  $\sqrt{175} - \sqrt{-81}$ . Sed nova hinc emergit impossibilitas in Algebra, (præter eam quæ etiam Lateralibus æquationibus est communis, quantitatem Negativam, seu minorem quam nihil,) nimirum *Radicem quadraticam magnitudinis negativæ*; quæ stricto sensu haberi non potest, ne supposita quidem negativa magnitudine; quippe, siue supponatur ea radix negativa, siue positiva, quadratum saltem, ex hac in se ducta (propter similia signa) prodiret affirmativum.

Novaque hæc in Algebra impossibilitas, parilem arguit in Geometria impossibilitatem casus propositi. Nempe, non posse punctum  $B$  usquam reperiri (quod supponebatur) in  $AC$  recta, utcumque in utramvis partem producta.

Duo tamen (etiam hic) puncta  $B$  designantur, extra quidem eam lineam, sed in eodem plano; ad quorum utrumvis si ducantur  $AB$   $PB$  rectæ, habebitur Triangulum *Succedaneum*; cujus latera  $AP$   $PB$  sint qualia imperantur, angulusque  $PAC$ ; sed & imperata altitudo  $PC$ , non quidem supra  $AB$  (quæ supponebatur cum  $AC$  coincidere) sed saltem supra  $AC$  ad quam factus est angulus imperatus; duorumque quadratorum  $PBq$ ,  $PCq$ , differentia est  $CBq$ .

Et prout, in casu primo, duo valores  $AB$  (affirmativi) simul exhibent duplum rectæ  $AC$ , ( $16 + 9$ ,  $+ 16 - 9$ ,  $= 16 + 16 = 32$ ;) sic hic,  $\sqrt{175} + \sqrt{-81}$ ,  $+ \sqrt{175} - \sqrt{-81}$ ,  $= 2\sqrt{175}$ .

Itemque, in Figura, quamvis non ipsæ  $AB$   $AB$  duæ rectæ (quæ casu primo jacebant in ipsa  $AC$  recta,) ipsæ tamen quibus imminent  $A\beta$   $A\beta$  rectæ ichnographicæ, simul æquant duplum ipsius  $AC$ : Hoc est, si utrivis ipsarum  $AB$ , adjungatur  $B\alpha$  reliquæ æqualis & cum sua declivitate, tota  $AC\alpha$  (punctorum  $A\alpha$  distantia) erit recta æqualis duplæ  $AC$ , prout in primo casu  $AC\alpha$ .

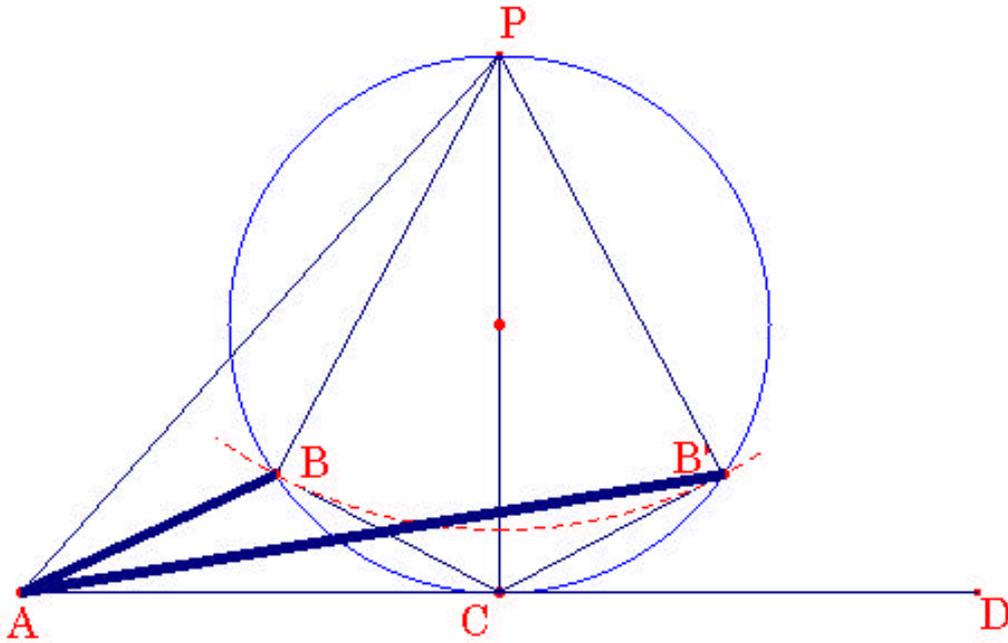
Præcipuum discrimen, hoc est; quod, in casu primo, jacentibus in  $AC$  recta punctis  $B$   $B$ , rectæ  $AB$   $AB$  eædem sunt cum rectis ichnographicis  $A\beta$   $A\beta$ ; sed non item in casu ultimo, ubi  $B$   $B$  puncta punctis ichnographicis  $\beta\beta$  super eminent, (nempe, quantum est sinus versus ipsius Arcus  $CB$ , diametro  $PC$  descripti,) quo casus reddatur possibilis: sed utrobique  $AC\alpha$  (linea ichnographica ipsius  $AB\alpha$ ) æquatur duplæ  $AC$ .

Prout igitur, cum æquationis quadraticæ radix prodit negativa; dicendum (verbi gratia) Punctum  $B$  (pro eo statu) haberi non posse (ut supponitur) in exposita  $AC$  prorsum; posse tamen retrorsum ab  $A$  in eadem recta: Hic vero (de radice quadrati negativi) dicendum; Non haberi quidem posse punctum  $B$  (ut erat suppositum) in  $AC$  recta (vel ante vel retro;) posse tamen (in eodem plano) supra rectam illam.

Hæc ego fusius profecutus sum, quoniam nova est (quantum scio) hæc notio; nec viderim quomodo dilucidius possem eam explicare, aut (quas vocant) *radices imaginarias* æquationum quadraticarum: quales quidem sunt quæ hic exhibentur.

ウォリスは、 $b/2 > \sqrt{a}$  (解が実数である) の場合の証明が  $b/2 < \sqrt{a}$  (解に負数の平方根が含まれる) の場合でも成り立つように強引に「つじつまを合わせて」考えました。そして、その「つじつまあわせ」により  $b/2 > \sqrt{a}$  の場合の証明が  $b/2 < \sqrt{a}$  の場合でも成り立つとしました。つまり、依然として  $a^2 - ba + a = 0$  ( $b/2 < \sqrt{a}$ ) の解 (負数の平方根を含むもの) は、二つの長さ  $a = AB, AB'$  であるとしました。

その2つの長さを図示すると、以下のようになります。



彼はこのようにして、2次方程式の解が負数の平方根を含む場合でも作図できたとなりました。

## ウォリスの主張



2次方程式の解が実数なら，解を表す重要な点  $B, B'$  は直線  $AC$  上にある．

しかし，解が負数の平方根を含むような場合，点  $B, B'$  は直線  $AC$  上にあるのではなく， $AC$  から離れて取るのである．

私は大いにこれを主張する．なぜなら私が考える記述は新しいからである．

ウォリスのこの主張をみなさんはどう思いますか？この主張はこんなところが間違っている、ここが欠点である、いや私は賛成であるなど、自由に記述してください。

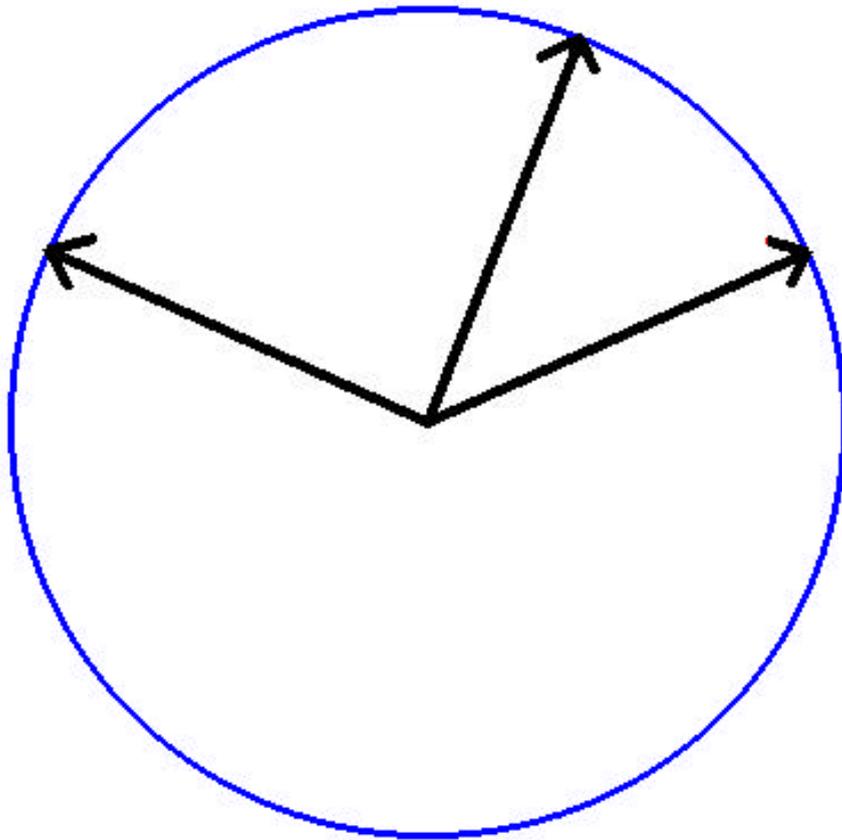
今日の授業を受けての感想を書いてください。

# 授業資料

年 組 番 氏名

「 $\sqrt{-1}$  は描けるのか!？」

Vol. 3



授業者：筑波大学大学院教育研究科 1 年

小松 孝太郎

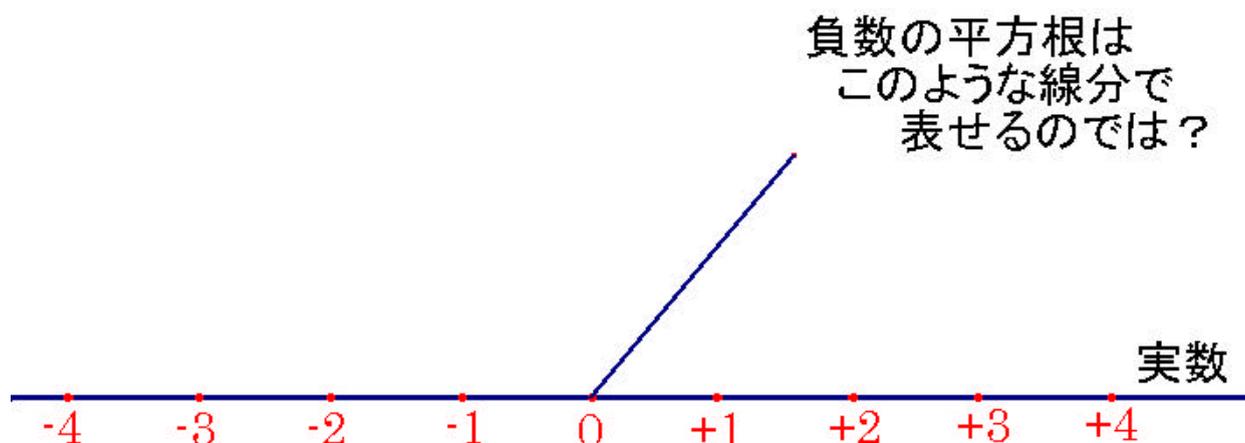
## 1 時間目からの復習

18 世紀末期の主要な問題は、 $\sqrt{-1}$  の図的表示とその説明とであった。負数の場合のように、 $\sqrt{-1}$  もこれを目の前に図示できるまでは、その理論を十分に展開することはできなかった。それで、ニュートン、デカルト、オイラー時代には、 $\sqrt{-1}$  はやはり代数的虚構とされていたのである。

(参照：カジヨリ著，小倉金之助補訳『初等数学史』)

私たちは負数の平方根の図示に最初に挑戦したウォリスの考えを考察しました。ウォリスの考えは不完全であり、当時の数学者にはほとんど受け入れられませんでした。

それにもかかわらず、ウォリスは以下のことを主張しました。「負数の平方根は実数を表す数直線の頭上にある!!」と。



## 5 . $\sqrt{-1}$ の図示への挑戦 (ヴェッセル)

負数の平方根の図示に関するウォリスの提言は当時の人々にはあまり受け入れられませんでした。その理由としては、以下の2点が挙げられます。

彼の提言は非常に複雑で混乱したものであったこと

負数の平方根同士の演算 (足し算や掛け算) の図示に関して何も触れていなかったこと

しかし、ウォリスが自分の考えを示した 1685 年からは 100 年近く経っても負数の平方根が図示されることはありませんでした。そして、1797 年になって負数の平方根の図示に成功したと公表した人が現れました。それはヴェッセルという人物です。

名前 : Caspar Wessel

年代 : 1745 年 ~ 1818 年

出身 : デンマーク

ヴェッセルは専門的な数学者ではなく、測量技師であった。毎日地図を作っており、平面図形や球面図形をよく取り扱った。論文はデンマーク語で書かれており、当時デンマーク語は全く読まれていなかったため、負数の平方根の図示に関する彼の考えは長く注目されなかった。1897 年にフランス語の翻訳が出たことでようやく多くの注目を浴びた。

ウォリスのまわりくどい図示とは違った  
ヴェッセルの方法を見てみよう!!



Om  
**Directionens analytiske Betegning,**  
 et Forsøg,  
 anvendt fornemmelig  
 til  
 plane og sphæriske Polygoners Opløsning.  
 Af  
 Caspar Bessel, Landmaaler.

---

**N**ærværende Forsøg angaaer det Spørgsmaal, hvordan Directionen analytisk bør betegnes, eller hvordan rette Linier burde udtrykkes, naar af een eneste Ligning mellem een ubekendt og andre givne Linier skulde kunne findes et Udtryk, der forestillede baade den ubekendtes Længde og dens Direction.

For nogenledes at kunne besvare dette Spørgsmaal, lægger jeg til Grundvold to Sætninger, der synes mig uregtelige. Den første er: at den Directionens Forandring, der ved algebraiske Operationer kan frembringes, ogsaa bør ved deres Tegn at forestilles. Den anden: at Direction er ingen Giensstand for Algebra, uden for saavidt den ved algebraiske Operationer kan forandres. Men da den ved disse ei kan forandres (i det mindste efter den sædvanlige Forklaring), uden til den modsatte, eller fra positiv til negativ, og omvendt: saa skulde disse to Directioner alene kunne betegnes paa den bekjendte Maade, og i Hensigt til de øvrige Problemet være uopløseligt. Dette er vel

D 0 0 2

ogfaa

## 方向つき線分

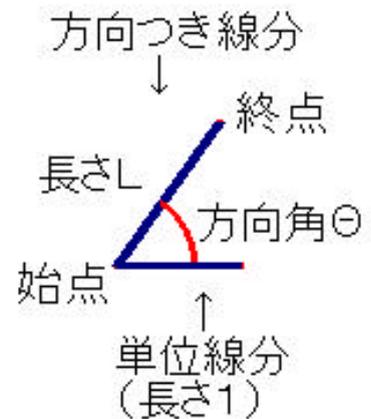
測量家で普段から平面図形を取り扱っていたヴェッセルは、方向つきの線分の計算を取り扱おうと考えました。

たとえば、

 という線分と  という線分を足したらどうなるのか？

 という線分と  という線分を掛けたらどうなるのか？

方向つき線分とは、長さ $L$ と単位線分（長さ $1$ ）からの方向角（傾斜）をもつものです。

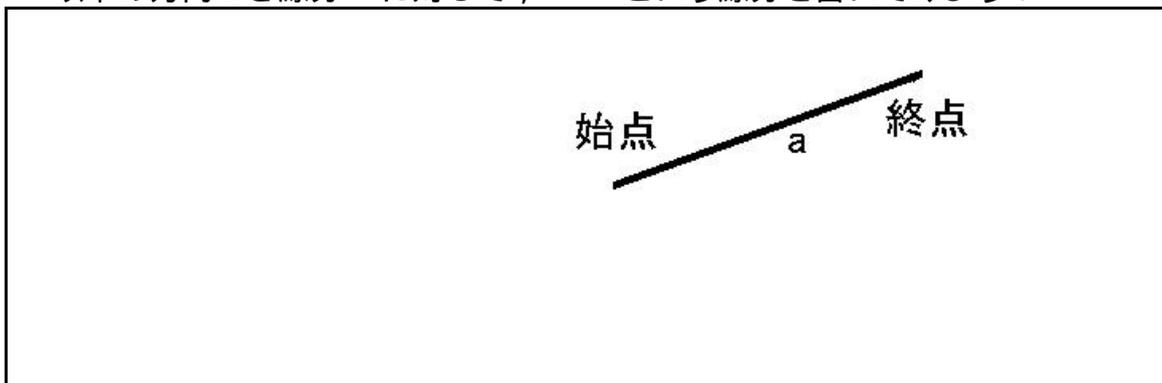


## 方向つき線分の演算に関する定義

定義

$a$  という方向つき線分に対して  $-a$  という方向つき線分は、 $a$  と長さが同じで  $a$  とは反対向きのものである。

以下の方向つき線分  $a$  に対して、 $-a$  という線分を書いてみよう。



# ESSAI

SUR

## LA REPRÉSENTATION ANALYTIQUE DE LA DIRECTION,

PAR

CASPAR WESSEL.

Traduction du mémoire intitulé: *Om Directionens analytiske Betegning*  
[*Nye Samling af det Kongelige Danske Videnskabernes Selskabs Skrifter, Fønte Del. Kjøbenhavn 1799*].

Publié avec les trois planches de l'original

et préfaces de MM. H. VALENTINER et T.-N. THIELE

par

L'Académie Royale des Sciences et des Lettres de Danemark

à l'occasion du centenaire de sa présentation à l'Académie le 10 mars 1797.

COPENHAGUE.

BIANCO LUNO (P. DREYER), IMPRIMEUR DE LA COUR.

1897.

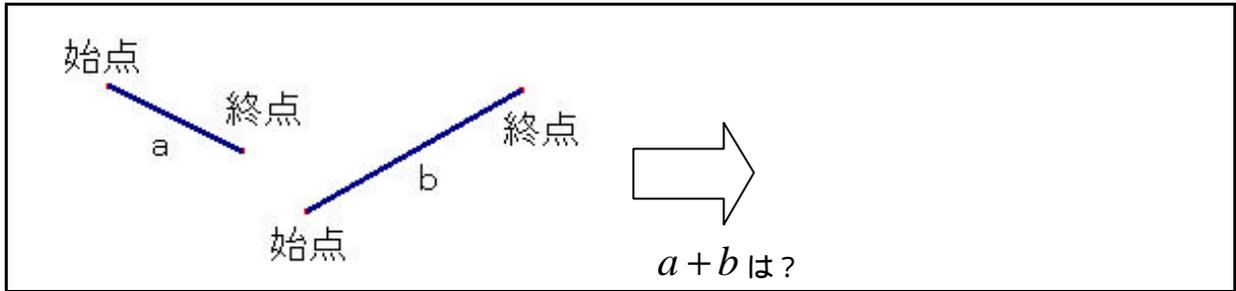
ヴェッセル, フランス語訳, 1897 年

定義

2つの方向つき線分に対してその和は以下のように決める。

1つ目の線分が終わったところから2つ目の線分が始まるように結合させたら、それは加えられ、結合された線の最初の点から最後の点まで直線を結ぶ。この線分が和の線分である。

では、以下の線分 a と線分 b を足した線分を書いてみよう。



この和の定義、どこかで見たことないかな？

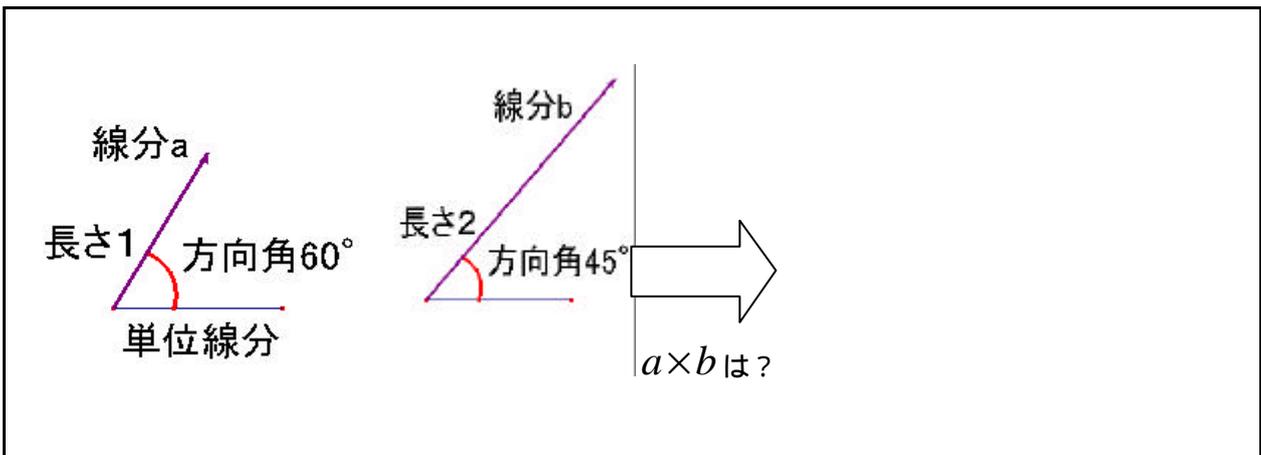
定義

2つの方向つき線分に対してその積によってできる方向つき線分を以下のように決める。

まず、2つの線分の始点が両方一致するように移動する。そして、以下の長さや方向角をもつ線分が2つの線分の積である。

- ・長さ：2つの方向つき線分の長さの積
- ・方向角：2つの線分と単位線分とのそれぞれの方向角の和

では、同様に以下の線分 a と線分 b を掛けた線分を書いてみよう



二つの方向つき線分の長さが1である場合の積を

Cabri で見てみよう!!

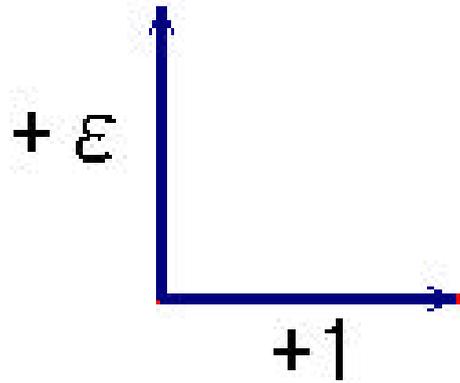
## 負数の平方根の図示への道

彼はこのように和と積を定義したあと、単位線分とそれに垂直な線分を以下のように決めました。

+ 1 : 単位線分

+  $\epsilon$  : 長さが 1 , 単位線分とは垂直で始点と同じ  
つまり, + 1 : 方向角  $0^\circ$  , +  $\epsilon$  : 方向角  $90^\circ$  です。

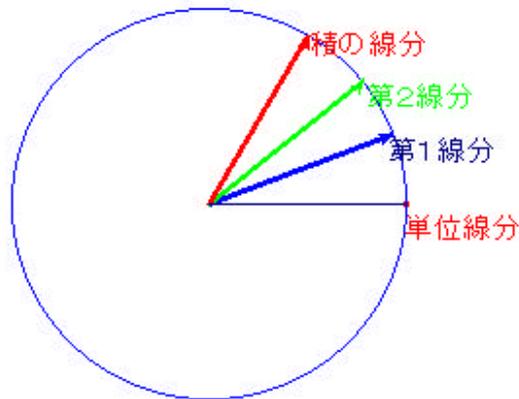
また, 例えば, + 3 を + 1 と同じ方向で長さ 3 の線分, + 2  $\epsilon$  を +  $\epsilon$  と同じ方向で長さが 2 の線分などしました。



では次のことを考えてみよう!!

Cabri で考えた図で + 1 , +  $\epsilon$  はどこにあるでしょうか?

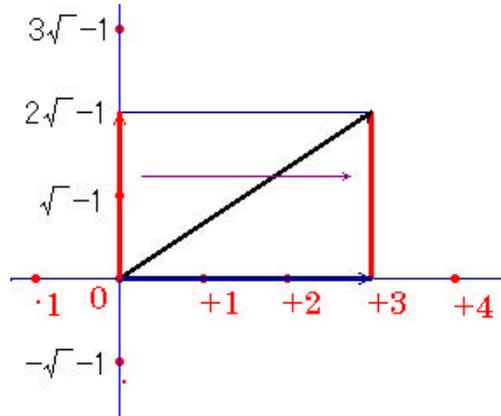
2つの方向つき線分とも +  $\epsilon$  に合わせると積の線分はどうなるでしょうか? また, Cabri だけでなく方向つき線分の積の定義に基づいて計算するとどうなるでしょうか?



, より何がわかるでしょうか?

## 負数の平方根と2次方程式の解の図示

ヴェッセルは負数の平方根を含むような数を図示するとき以下の手順を踏みました。(例.  $3+2\sqrt{-1}$ )  
実数を表す直線とそれに垂直な負数の平方根を表す直線を設定する。  
負数の平方根を含む数について、実数の部分と負数の平方根の部分に分ける。  
( $3$ ,  $2\sqrt{-1}$  を表す方向つき線分をそれぞれ考える)  
実数を表す方向つき線分と負数の平方根を表す方向つき線分との和として図示する。(  $3$  と  $2\sqrt{-1}$  の方向つき線分を加える )



では、ヴェッセルの方法でデカルトもウォリスも成し遂げることができなかった負数の平方根を含む2次方程式の解を図示することができるだろうか？



aura

$$\overline{KP} = \overline{KN} + \overline{NP}.$$

On aurait pu également tirer PM parallèle à KA, et on aurait eu

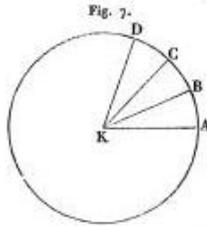
$$\overline{KP} = \overline{KM} + \overline{MP};$$

mais ces deux expressions sont identiques, car  $\overline{KM} = \overline{NP}$  et  $\overline{KN} = \overline{MP}$ . Ainsi, comme il n'y a que ces deux manières d'opérer la décomposition proposée, on en conclut que, si A et A' sont de l'ordre a, B et B' de l'ordre b, a étant différent de b, et que l'on ait l'équation

$$A + B = A' + B',$$

il en résulte les deux équations  $A = A'$ ,  $B = B'$ .

11. Passons à la multiplication des lignes dirigées, et proposons-nous d'abord de construire le produit  $\overline{KB} \times \overline{KC}$



(Fig. 7), dont les facteurs sont des unités non primes. Soit pris angle  $\overline{CKD} = \text{angle } \overline{AKB}$ .

D'après ce qui a été dit plus haut, n° 4, note (\*), on

aura

$$\overline{KA} : \overline{KB} :: \overline{KC} : \overline{KD},$$

d'où

$$\overline{KA} \times \overline{KD} = \overline{KB} \times \overline{KC};$$

mais

$$\overline{KA} = +1,$$

donc

$$\overline{KB} \times \overline{KC} = \overline{KD}.$$

Ainsi, pour construire le produit de deux rayons dirigés, il faut prendre, à partir de l'origine des arcs, la somme des deux arcs qui appartiennent à ces rayons, et l'extrémité de l'arc-somme déterminera la position du rayon-produit : c'est encore une multiplication logarithmique. Il n'est pas nécessaire de montrer que cette règle a lieu pour un nombre quelconque de facteurs.

Si les facteurs ne sont pas des unités, on pourra les mettre sous la forme  $m \cdot \overline{KB}$ ,  $n \cdot \overline{KC}$ , ...,  $m, n, \dots$  étant des coefficients ou lignes primes positives; et le produit sera

$$(m \dots) \cdot (\overline{KB} \cdot \overline{KC} \dots) = (m \dots) \cdot \overline{KP}.$$

Or le produit de la ligne prime positive  $(m \dots)$  par le rayon  $\overline{KP}$  n'est autre chose que cette même ligne tirée dans la direction de ce rayon.

La division s'opérera par une marche inverse, qu'il serait superflu de détailler.

12. Avec ces règles, on opérera une construction quelconque des lignes dirigées, comme on pratique celles des

アルガン, Essai sur une maniere de representer les quantites imaginaries dans les constructions geometriques, 1806 年

plexen Zahlen vier Einheiten  $+1, -1, +i, -i$ . *Zusammengesetzt* heisst eine complexe ganze Zahl, wenn sie das Product aus zwei von den Einheiten verschiedenen ganzen Factoren ist; eine complexe Zahl hingegen, die eine solche Zerlegung in Factoren nicht zulässt, heisst eine complexe Primzahl. So ist z. B. die reelle Zahl 3, auch als complexe Zahl betrachtet, eine Primzahl, während 5 als complexe Zahl zusammengesetzt ist  $= (1+2i)(1-2i)$ . Eben so wie in der höhern Arithmetik der reellen Zahlen spielen auch in dem erweiterten Felde dieser Wissenschaft die Primzahlen eine Hauptrolle.

Wird eine complexe ganze Zahl  $a+bi$  als Modulus angenommen, so lassen sich  $aa+bb$  unter sich nicht congruente, und nicht mehrere, complexe Zahlen aufstellen, von denen einer jede vorgegebene ganze complexe Zahl congruent sein muss, und die man ein vollständiges System incongruenter Reste nennen kann. Die sogenannten kleinsten und absolut kleinsten Reste in der Arithmetik der reellen Zahlen haben auch hier ihr vollkommenes Analogon. So besteht z. B. für den Modulus  $1+2i$  das vollständige System der absolut kleinsten Reste aus den Zahlen  $0, 1, i, -1$  und  $-i$ . Fast die sämtlichen Untersuchungen der vier ersten Abschnitte der *Disquisitiones Arithmeticae* finden mit einigen Modificationen, auch in der erweiterten Arithmetik ihren Platz. Das berühmte Fermatsche Theorem z. B. nimmt hier folgende Gestalt an: Wenn  $a+bi$  eine complexe Primzahl ist, und  $k$  eine durch jene nicht theilbare complexe Zahl, so ist immer  $k^{a+bb-1} \equiv 1$  für den Modulus  $a+bi$ . Ganz besonders merkwürdig ist es aber, dass das Fundamentalthem für die quadratischen Reste in der Arithmetik der complexen Zahlen sein vollkommenes, nur hier noch einfacheres, Gegenstück hat: sind nemlich  $a+bi, A+Bi$  complexe Primzahlen, so dass  $a$  und  $A$  ungerade,  $b$  und  $B$  gerade sind, so ist die erste quadratische Rest der zweiten, wenn die zweite quadratische Rest der ersten ist, hingegen die erste quadratische Nichtrest der zweiten, wenn die zweite quadratische Nichtrest der ersten ist.

Indem die Abhandlung nach diesen Voruntersuchungen zu der Lehre von den biquadratischen Resten selbst übergeht, wird zuvörderst anstatt der blossen Unterscheidung zwischen biquadratischen Resten und Nichtresten eine Vertheilung der durch den Modulus nicht theilbaren Zahlen in vier Classen festgesetzt. Ist nemlich der Modulus eine complexe Primzahl  $a+bi$ , wo immer  $a$  ungerade,  $b$  gerade vorausgesetzt, und der Kürze wegen  $p$  statt  $aa+bb$  geschrieben wird, und  $k$  eine complexe durch  $a+bi$  nicht theilbare Zahl, so wird allemal  $k^{(p-1)}$

einer der Zahlen  $+1, +i, -1, -i$  congruent sein, und dadurch eine Vertheilung sämtlicher durch  $a+bi$  nicht theilbarer Zahlen in vier Classen begründet, denen der Reihe nach der biquadratische Character  $0, 1, 2, 3$  beigelegt wird. Offenbar bezieht sich der Character  $0$  auf die biquadratischen Reste, die übrigen auf die biquadratischen Nichtreste, und zwar so, dass dem Character  $2$  zugleich quadratische Reste, den Charactern  $1$  und  $3$  hingegen quadratische Nichtreste entsprechen.

Man erkennt leicht, dass es hauptsächlich darauf ankommt, diesen Character bloss für solche Werthe von  $k$  bestimmen zu können, die selbst complexe Primzahlen sind, und hier führt sogleich die Induction zu höchst einfachen Resultaten.

Wird zuerst  $k = 1+i$  gesetzt, so zeigt sich, dass der Character dieser Zahl allemal  $\equiv \frac{1}{2}(-aa+2ab-3bb+1) \pmod{4}$  wird, und ähnliche Ausdrücke finden sich für die Fälle  $k = 1-i, k = 1+i, k = -1-i$ .

Ist hingegen  $k = a+bi$  eine solche Primzahl, wo  $a$  ungerade und  $b$  gerade ist, so ergibt sich durch die Induction sehr leicht ein dem Fundamentalthem für die quadratischen Reste ganz analoges Reciprocitätsgesetz, welches am einfachsten auf folgende Art ausgedrückt werden kann:

Wenn sowohl  $a+b-1$  als  $a+b-1$  durch  $4$  theilbar sind (auf welchen Fall alle übrigen leicht zurückgeführt werden können), und der Character der Zahl  $a+bi$  in Beziehung auf den Modulus  $a+bi$  durch  $\lambda$ , hingegen der Character von  $a+bi$  in Beziehung auf den Modulus  $a+b-1$  durch  $l$  bezeichnet wird: so ist  $\lambda = l$ , wenn zugleich eine der Zahlen  $b, b$  (oder beide) durch  $4$  theilbar ist, hingegen  $\lambda = l \pm 2$ , wenn keine der Zahlen  $b, b$  durch  $4$  theilbar ist.

Diese Theoreme enthalten im Grunde alles Wesentliche der Theorie der biquadratischen Reste in sich: so leicht es aber war, sie durch Induction zu entdecken, so schwer ist es, strenge Beweise für sie zu geben, besonders für das zweite, das Fundamentalthem der biquadratischen Reste. Wegen des grossen Umfangs, zu welchem schon die gegenwärtige Abhandlung angewachsen ist, sah sich der Verfasser genöthigt, die Darstellung des Beweises für das letztere Theorem, in dessen Besitz er seit 20 Jahren ist, für eine künftige dritte Abhandlung zurückzulassen. Dagegen ist in vorliegender Abhandlung noch der vollständige Beweis für das erstere die Zahl  $1+i$  betreffende Theorem (von welchem die an-

ガウス, Theoria Residuorum Biquadraticorum, Commentatio Secunda, 1831 年

## 負数の平方根の図示に成功した他の数学者

- Jean Robert Argand (ジャン・ロベール・アルガン)  
1806年に公表
- Carl Friedrich Gauss (カール・フリードリッヒ・ガウス)  
1831年に公表したが1796年には既に気付いていたのではないかと思われる。  
彼は負数の平方根を「*complexe Zahlen*(英語: complex number, 日本語: 複素数)」と命名した。  
その後、彼は複素数の理論を発展させていき、以下の文に示されるように、複素数に対して市民権を与えたのである。

ガウスの権威をもって初めて、ようやく複素数から神秘主義のヴェールがすっかり取り除かれた。数平面上の点としての、彼の単純明快な複素数の説明はこの仮想的な数をすべての神秘と空想から解き放ち、この数に実数と並び数学における完全に同等な市民権を与えたのである。

(引用文献: Remmert 著「複素数」、Lamotke 編『数』、成木勇夫訳)

また、ガウスは複素数の図示を利用して古来 2000 年以上問題であった正 17 角形の作図可能性を証明しました。

### 正 17 角形の作図題に関する参考文献

- Gauss 著, 高瀬正仁訳, 「ガウス整数論」, 朝倉書店  
ガウスの原典の日本語訳である。
- Stuart Hollingdale 著, 岡部恒治訳, 『数学を築いた天才たち(下)』, 講談社  
ガウスの理論をわかりやすく解説している。
- 大野栄一著, 『定木とコンパスで挑む数学』, 講談社  
ガウスの理論を高校生にもわかりやすいように変えているが、実際の正 17 角形の作図法を示している。